

アメリカ文化センター設置のねらい
—神奈川県立図書館所蔵アメリカ文化センター資料の分析を通して—
石原眞理（慶應義塾大学大学院） ishihara@slis.keio.ac.jp

1 研究の背景と目的

第二次世界大戦の終結間もない 1945 年 9 月 22 日に設置された GHQ/SCAP 民間情報教育局 (Civil Information and Education Section, 以下 CIE) は、全国 23 箇所 に CIE 図書館 (Civil Information and Education Information Center) を設置し、アメリカから取り寄せた英文図書や逐次刊行物を一般市民に公開した。1952 年 4 月の日米講和条約発効後、その機能は米国国務省に移管され、13 都市の「アメリカ文化センター (American Cultural Center, 以下、ACC)」として活動することになる。その後、朝鮮戦争、ベトナム戦争を経て急速に悪化したアメリカの財政状況や日本の高度経済成長、テレビ受像機の普及等の理由により、ACC の事業は次第に縮小されていく。1972 年にはアメリカン・センター (以下、AC) として機能再編され、東京・札幌・名古屋・大阪・京都・福岡の 6 都市に整理統合された¹⁾。

CIE 図書館の設置から AC として活動している現在まで 60 年余りが経過した。この間、時代の要請の変化、設置者や所管の変遷に伴い、その設置の目的やねらいは変化している。本研究では、CIE 図書館や ACC の活動が最も活発であった 1946 年から 1960 年代後半の CIE 図書館及び ACC が、どのような資料を提供していたのかを分析することにより、設置者がどのようなねらいの下にこれらの施設を運営したのかを探ることを目的とする。

CIE 図書館については、設置された状況に関する今までの研究²⁾などはあるが、実際にどのような資料が提供されていたのか、といった点については研究が進んでいない。ACC についても、各地の ACC の活動状況をまとめた資料は存在するが、所蔵資料からのアプローチはほとんどなされていない。本研究は、CIE 図書館及び初期 ACC 所蔵資料について、分類毎の構成比による分析や、特徴のある

個々の資料の調査を通して、設置者のねらいを探ることを試みる。

2 CIE 図書館及び ACC の旧蔵資料の状況

現在、AC は全国に 5 箇所あるが、時間の経過と共に蔵書内容は変化しており、CIE 図書館及び ACC 当時とは異なっている。1952 年に CIE 図書館から ACC に移行した図書館は、この 5 箇所及び大阪に統合された京都を除くと仙台・新潟・金沢・神戸・横浜・広島・松山の 7 箇所である。これらの ACC の蔵書は、閉鎖後、主に地元の公共図書館や大学に寄贈されたが、当時の蔵書の特徴を残しながらまとまった形で保存されている例は、神奈川県立図書館以外にほとんど確認されていない³⁾。

神奈川県立図書館 (以下、県立図書館) は、横浜 ACC の閉鎖の際に、所蔵資料のすべてを継承した。横浜 ACC は、横浜市中区にあった CIE 図書館を受け継ぎ 1952 年 5 月に設置されたが、東京 ACC への統合のため、1967 年 3 月に閉鎖された。その際に県立図書館に寄贈された図書は、洋書 10,543 冊、和書 2,444 冊の合計 12,987 冊⁴⁾であった。同館の「ACC 文庫」は、2008 年 3 月末現在、和書・洋書合わせて 10,797 冊である。

3 本研究の概要

本研究では、横浜 ACC から県立図書館に寄贈された資料 (以下、ACC 文庫) を質的量的に分析することにより、1967 年までの ACC の所蔵資料の特徴を明らかにし、設置者がどのような意図を持って設置し運営したかを探る。

ACC 文庫に対する調査は、①ACC 文庫の書誌情報の調査、②特徴ある資料に対する個別の調査、③ACC 文庫関係者に対するインタビュー調査、の 3 種類の方法で行った。

①では、ACC 文庫の書誌情報を基に、分類別 (デューイ十進分類法)、刊行年別に統計をとり、分析した。刊行年による分析は、年代による蔵書構成の違いや、CIE 図書館時代の

資料と ACC 時代の資料の相違を明らかにするために行った。更に、この結果を、OCLC の書誌データと比較した。

②の個々の資料に対する調査では、特徴のある資料や分野の資料に対して、直接資料に当たって調査した。

③のインタビュー調査では、横浜 ACC から資料を寄贈された当時の ACC 文庫担当者に、寄贈のいきさつや資料の内容について尋ねた。

①と②の調査については、対象を洋書のみとした。和書は1967年当時から2,444冊と数が少なかったが、2008年3月末現在の所蔵数は1,611冊と、更に少なくなっている。県立図書館はACC和書を一般和書に繰り入れた時期があり、現在のACC文庫和書は、当時の蔵書構成とかなり変わっていると考えられるからである。ACCの中心的な資料は洋書であることなどから、今回の調査対象は洋書に限定することにした。

ACC文庫には、1967年以降に発行された資料も含まれている。県立図書館は横浜ACC閉鎖後も数年間東京ACCから逐次刊行物を中心とした資料の寄贈を受けていたが、これらの資料も含まれているからである。しかし、本稿で研究の対象とするのは横浜CIE及び横浜ACCの資料であるため、この部分は本調査の対象からは除いた。

4 調査の結果

4.1 書誌情報を中心にした調査

第1表にACCから寄贈された洋書の分類別統計、2008年現在のACC文庫の分類別統計、OCLCデータの分類別統計を示した。

ACC文庫の資料数は、1951年以前をCIE図書館時代、1952年から1966年までを横浜ACC時代として示した。1951年以前の資料を横浜ACC時代に受入れたり、1966年以前に発行された資料が1967年以降に寄贈された可能性もあるが、本研究においては便宜上発行年で区切り、CIE図書館時代資料と横浜ACC時代資料として比較することにした。

横浜ACCからの寄贈資料の構成比を、OCLC書誌データの構成比と比較した。1966年以前

にアメリカで刊行された資料と横浜ACCの所蔵資料とを比較することにより、横浜ACCではどの分野に重点を置いて収集していたかを探るためである。この結果、寄贈資料数の分類別割合がOCLCデータと比較して多いのは、「社会科学」「芸術」「文学・小説」「歴史・伝記」であることが分かった。

OCLCデータと比較して、逆に少ないのは、「宗教」「純粋科学」「応用科学」である。横浜CIE図書館では、開館一周年当時「技術」の利用が多かった⁵⁾との記録があるが、現在残っているACC文庫の「純粋科学」「応用科学」分野の資料は多くはない。“60年代前半になると、技術・医学分野で目覚しく発展してきた日本では、「研究機関も自前で文献は買えるようになったのだから、ACC図書館がこの分野の蔵書を持つ必要はない」として、自然科学、応用科学部門の図書・雑誌は、大幅に廃棄され、大学図書館に寄贈された。”⁶⁾結果だと考えられる。科学技術分野は、1967年の寄贈時から既に多いとは言えない状態であった。

CIE図書館時代とACC時代との比較で特に顕著なのは、「芸術」「文学・小説」「歴史・伝記」「児童書」が減少し、「社会科学」が伸びていることである。CIE図書館時代には全体の1割を占めていた児童書が、ACC時代には5%以下になっている。例えば函館CIE図書館では利用者の6割が小中学生であり⁷⁾、金沢CIE図書館の開館直後の利用者のうち学生・生徒の割合は約40%であった⁸⁾ことからみても、CIE図書館は全般的に小中学生の利用が多かったようである。そのため児童書の収集に力を入れていたのであろう。「社会科学」分野の資料は増加しており、横浜ACC時代の全所蔵資料のおよそ3分の1を占めている。

4.2 個々の資料に対する調査

「総記」に分類される資料にはレファレンス資料や図書館関係資料が多い。レファレンス資料では、『*Books in Print*』『*Book Review Digest*』『*Cumulative Book Index*』等の逐次刊行物が多い。日本に現在のような公共図書館が普及していなかった時代に、手本となる

第1表 ACC文庫（洋書）とOCLCの書誌データ

	横浜ACCからの寄贈資料*	ACC文庫（洋書）資料					OCLC書誌データ**
		1951年以前 (CIE図書館時代)	1952-1966年 (ACC時代)	CIE図書館とACC時代の合計	1967年以降及び不明	合計	
総記	4.2%	3.2%	5.5%	4.5%	29.9%	6.1%	3.0%
哲学	2.0%	1.9%	1.5%	1.7%	1.4%	1.7%	2.8%
宗教	1.8%	2.4%	1.1%	1.7%	0.9%	1.6%	9.9%
社会科学	25.1%	18.4%	32.3%	26.4%	21.1%	26.3%	20.8%
語学	5.4%	2.0%	4.2%	3.3%	11.6%	3.8%	1.8%
純粋科学	3.7%	0.8%	2.1%	1.5%	0.3%	1.4%	7.0%
応用科学	6.7%	2.6%	7.7%	5.6%	6.0%	5.6%	16.5%
芸術	10.4%	12.9%	8.7%	10.4%	2.4%	9.9%	6.3%
文学・小説	18.4%	20.6%	13.7%	16.6%	17.9%	16.6%	13.4%
歴史・伝記	22.3%	25.2%	18.7%	21.5%	8.3%	20.6%	18.5%
児童書	—	10.0%	4.5%	6.8%	0.2%	6.4%	—
合計	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	実数	10,543	3,598	4,998	8,596	588	9,184

*横浜アメリカ文化センター寄贈資料は、1967年3月に寄贈された当時の資料の構成比

**OCLC書誌データは、1966年以前にアメリカで刊行された資料のうち、DCが付与されている書誌データの構成比

アメリカの公共図書館の活動内容を示すために、図書館関係資料を選択したように見える。

社会科学分野の資料は、質・量共に充実している。シリーズ本が少なく、単行本が多いことは、ライブラリアンらが1冊ずつ丹念に資料を選定したことを想像させる。

「芸術」「文学」「歴史（地理含む）」には、アメリカに関するものだけでなく、アジアや日本に関係した資料も一定程度含まれている。今によれば、アメリカが海外に図書館を展開する場合、各分野の専門家やライブラリアンが図書館に共通の基本コレクションを発展させ、新しく図書館を設置する毎に基本コレクションを送り出し、ライブラリアンがその国や住民の要求に合わせて蔵書を構築したという²⁾。アジアや日本に関係した資料は、ライブラリアンがその土地の事情に合わせて選定した部分であろう。

4.3 ACC文庫関係者に対するインタビュー調査

寄贈当時にACC文庫を担当した県立図書館元職員大村典子氏にインタビュー調査を行っ

た（実施日：2008年6月22日）。インタビューの内容は、①どのようにACC文庫に関わっていたか、②横浜ACCが閉鎖された時に、その資料はすべて県立図書館に寄贈されたか、③ACC文庫は、どのような点に特徴があると考えるか、④ACC文庫室は主にどのような方が利用していたか、であった。

インタビューの概要は次の通りである。

大村氏は、横浜ACCから資料が寄贈されると同時に採用された。1967年3月に資料が寄贈され、同年5月22日に県立図書館は「ACC文庫室」を開設したが、同氏はこのACC文庫室の担当となり、資料の受け入れ、提供、レファレンス・サービスなどを行った。横浜ACCからの寄贈資料には、図書だけではなく、パンフレットや雑誌等も含まれていた。この時、資料の他に目録カードとカードケース、パンフレット・キャビネット、閲覧機と椅子、地球儀なども寄贈されており、横浜ACC側には3月時点でACC文庫室の開室を前提に、すべての資料を寄贈する意思があったような印象を受けたという。横浜ACC閉鎖後も逐次刊行

物や単行書が送付されてきたそうである。

ACC 文庫室資料には、アメリカの良い面を紹介するような資料が多かったように記憶しているが、いずれかの分野に偏っていた、といった印象はなかったという。CIE 図書館では技術書の利用が多かったと小林恒男は書いているが⁵⁾、技術書が多かったという印象はないという。利用者については、例えば元船乗りであった方、大学の研究者等、利用者の何人かは印象に残っているが、全体像としての特徴はなかったように記憶しているそうである。利用者数はそれほど多くはなく、1970年3月に閉室となったという。

以上の大村氏のインタビュー内容をまとめると、①横浜 ACC は閉鎖の際に所蔵していた資料をすべて県立図書館に寄贈した、②横浜 ACC の資料には、いずれかの分野について重点的に収集している、といった印象はなかった、③ACC 文庫室の利用者像は、全体としては際立った特徴はなかった、ということになるだろう。

5 考察

CIE 図書館の設置者は GHQ/SCAP の CIE であり、ACC の設置者はアメリカ政府である。本研究が対象とする 1952 年から 1967 年まで、ACC を所管した機関は、時期により異なっていたが、国務省国際広報局 (IIA) であり、大統領直轄のアメリカ広報・文化交流庁 (USIA) の海外出先機関であるアメリカ広報・文化交流局 (USIS) であった¹⁾。1917 年にアメリカが海外において初めて広報活動を行った広報委員会 (CPI) 以降、広報文化活動を担った機関は、めまぐるしく変わった。それに伴い広報文化活動に対する考え方も、変化したと考えられる。渡辺靖によれば、アメリカの広報文化活動においては波及効果の「遅いメディア」と、即効性のある「早いメディア」(直接メッセージを伝える放送番組や雑誌など) を活用しており、ACC は前者に属していた¹⁾。

本研究では、ACC が最もよく利用されていた時代の ACC の資料をほぼそのまま受け継ぎ、40 年間保存してきた ACC 文庫について調査し

た。その結果、広範囲の資料を網羅しており、いずれかの分野に突出しているのではないことが分かった。社会科学、芸術、文学・小説、歴史・伝記については、他の分野よりも重点が置かれていたが、アメリカの広報活動を目的として設置された ACC の性格上、これらの分野に重きを置くことは想定されることである。設置者たちは ACC を「遅いメディア」と位置づけ、市民がアメリカの文化や社会に対する理解を徐々に深めることを狙っていたと言えるだろう。

6 おわりに

本研究においては、県立図書館の ACC 文庫のみを調査の対象とした。今後は他の ACC・CIE 図書館の状況も調べることが必要であろう。また、今回調査した資料は、日本側のものだけに限られていた。裏づけとなるようなアメリカ側の資料も調査することが必要であるだろう。今後の課題としたい。

《注・引用文献》

- 1) 渡辺靖. アメリカン・センター. 岩波書店, 2008, 221p.
- 2) 今まど子. アメリカの情報交流と図書館: CIE 図書館との係わりにおいて. 中央大学文学部紀要, 1994, vol. 156, p. 29-42.
- 3) 発表者が調査した限りでは、神奈川県立図書館以外にまとめて保存されている図書館には、神戸市立中央図書館(神戸 ACC 所蔵資料約 4,500 冊)、新潟大学附属図書館(新潟 ACC 所蔵資料約 5,000 冊)、東北大学附属図書館(仙台 ACC 所蔵資料約 1 万冊)など数館ある。しかし書誌データ等を整備し、利用者が利用できる状態になっているのは、神奈川県立図書館と神戸市立図書館のみであった。
- 4) 「アメリカ文化センター寄贈図書価格認定書」(1967 年)による。
- 5) 小林恒男. “CIE 及び ACC 図書館”. 横浜の本と文化: 横浜市中央図書館開館記念誌. 横浜市中央図書館, 2004, p. 640-643.
- 6) 豊後レイコ. あるライブラリアンの記録: レファレンス・CIE・アメリカンセンター・司書講習. 女性図書館職研究会, 2008, 54p., (シリーズ私と図書館, no. 1)
- 7) 函館市. “CIE 図書館の成立とその活動”. 函館市史 通説編第 4 巻. 函館市, 2002, 305-314p.
- 8) 今まど子. SCAP/CIE インフォメーション・センター: 金沢. 中央大学文学部紀要, 2001, no. 188, 1-25p.